へ 13
3736
2
へ 13
3736
1
Gôkan:(NO. 0
Akamatsu Mon
Book 1--9.

Gôkan:(NO. 0
Akamatsu Mon
Book 1--9.
へ 13
3736
1

へ13
3736
1

○足利六代將軍義教公初号義宣

- 義勝 足利七代將軍
- 義政 足利八代將軍 東山殿
  - 義澄 足利十代將軍
  - 義植 足利十代將軍
  - 義視 今出川殿
    - 義澄 足利九代將軍
    - 政知 堀越殿
- 鹿苑院義滿公御臺所 義教公御臺所 勝知院
  - 重子
  - 義資 裏松參議 左工門督
  - 重光 裏松大納言
- ○北山院

忠義教誠

赤松譚 首巻 上冊

丁未春剞刊

如渊外史作

歌川豊國画

元大坂町代地角
上州屋重藏板

京都將軍家八代慈照院准后義政公。驕奢ふもしくて。應仁の擾乱の。蕭牆の内より。起るを知しめさで。銀閣ふ月待山の松風と友とする。同仁ふ弄清泉の解虫眼と。憐とのたまはけるとゝ。誰も知とみぐら。抑其因て変る所以。一朝にのことふあらば。今概畧を撮記て。山名細川の確執より。赤松畠山の興廢家迄ふ互に矛楯を賣鷸蜂の勢ひかさりふ漁夫乃覬覦ことを考ひ尾乃如く解。土の如く壞を。始末を說と。

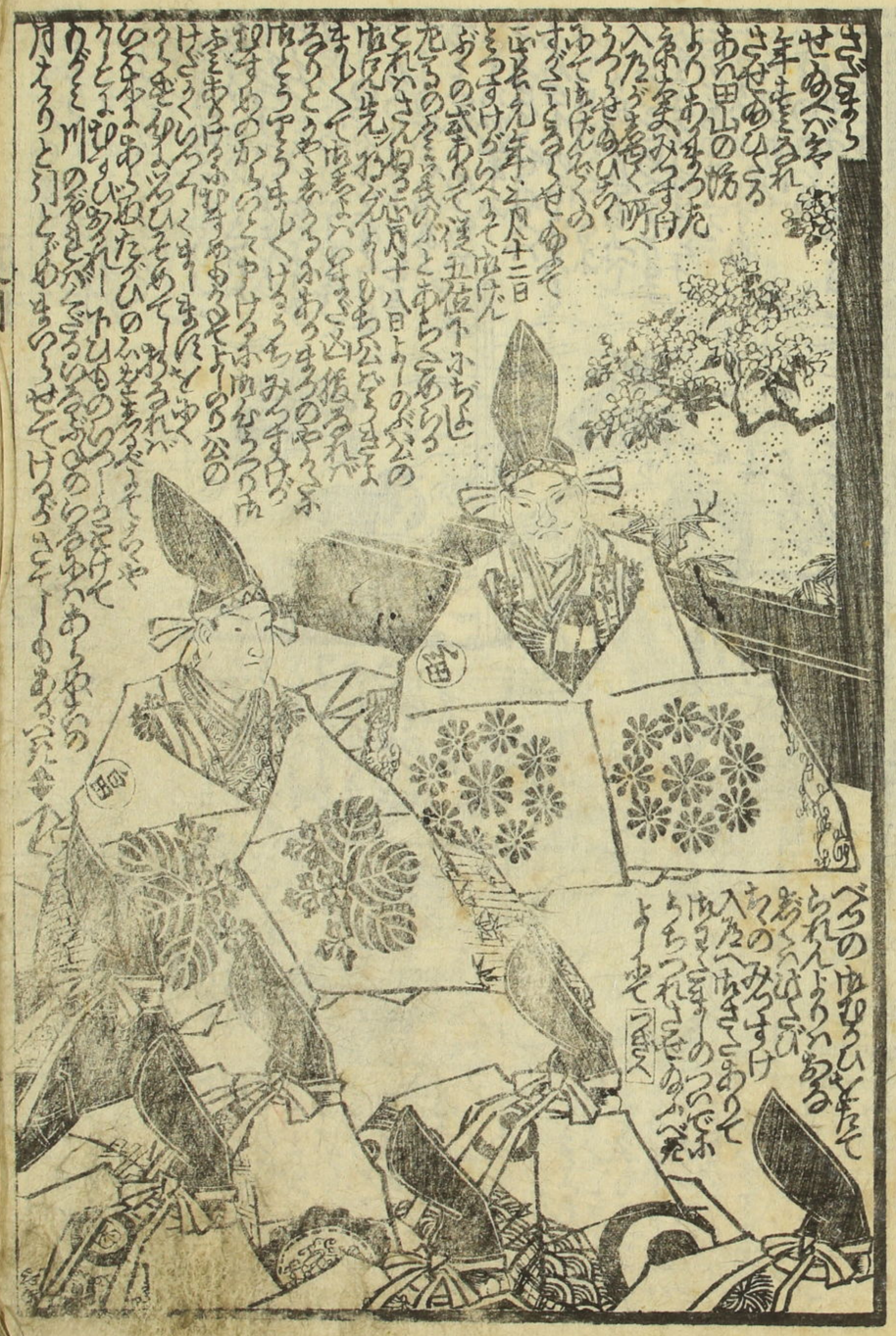
弘化四年孟春發行　如渊外史述

京都将軍家六代普廣院左大臣義教

寺持院将軍尊氏公の曽孫鹿苑院
贈太上皇義満公の二男にてくらゐ
青蓮院第廿二世道円法親王
の附弟として青蓮院ゟ
入室ゟ〳〵弟廿三世の
法燈と流せぬ京都
将軍五代義円尼后
とゆ〳〵ゟ長尊院将軍
義量卿十九オにて早世ゟ〳〵家
督の公達なりゟ〳〵京都軍家既ゟ
絶ゟ〳〵ゟけると時の管領畠山右エ門督満
家石清水八幡宮ゟ方て御亀と伺ひ終ゟこの
青蓮院義円尼后と選俗せさせゟ左馬頭
義宣と改名ありけゟ〳〵後義教と改めゟ

赤松左京大夫満祐入道の息女西御方

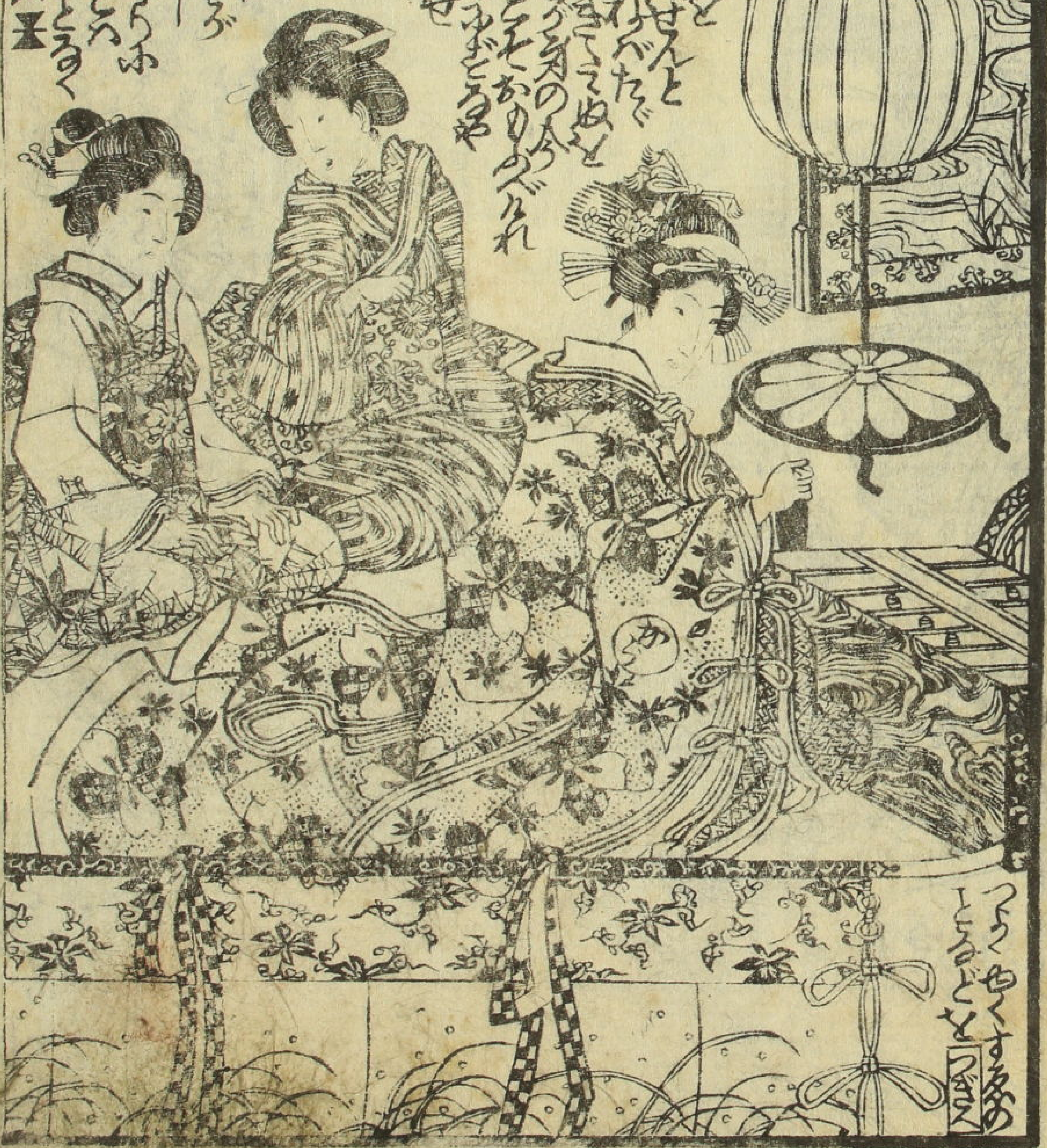
赤松満祐ゟ赤松律師則祐の嫡子
左京大夫義則の長男にて応安六年
癸丑の生るれば義教公将軍家相
續の正長元年ゟ五十六歳ゟ
備前播磨美作三国
四万六千〇五十八町の守
護職ゟれば
其禄今の
七十万石ゟ
及ぶゟれば
其富も勢ひ
もゟ〳〵



つゞき その夜のよふけ
もありけるにおの〳〵私の
そく女八今さらに身の
わとのゝうへらぬられて
みそかに〳〵もふし
くるしみなげきなりし
みづからにゝされしが
うちつけのひとよきみ
ころふともうそふかぶ
名のたつもよしまでて
そのつまさきとやらんま
のありさまどとちぎ
をしもなしぞ浪まよへ
はなしまゐのちへ
なりに将軍に
そのうちせのへべ
あめが下のれきろく
ゆゑ日月とてもに
ひかりかゞやくのふべし
なにぶ身をもへぞまま
みまさんとひそんをチ
国の名もある
あさまつぶりむすめ
とんかれのゝ
ききこの伝いさき
みひかのふかぶごも
あくまされがとて

〽かくいどうのつゐと
ふくめるうみくさこそ
ゆうら上まその年中も
ぬれやそのことをを
うしとつたべーりの云
みなと巻りにうろくをありて
のくまのゆうかゆうにならなの
うきせぬむゐへさびかて
とおうしずまあよろ
つくとまーありて
のちへまてでの
さびめうれが
日頃の一流
より⊗

⊗いのらのにらへけ
めいに死ろくを流
べふうふを致にし
下それにかきじも
までのれしよく
とまられ
むひとうにさ
ぐしされども海の
徒とれよのつひのとで
しにしるしべき
はあうねがあるめ
ゆうふえでらの
徒舟へとえとうきせ
のまべれとてをぞ
きうてよそあ
めへどもとさき
あれそのむくさこに
のうとされて何と
いくえとのその
まあもぞとぞふ
なうく下うろねが
よーのり公にいぐ
徒れをうくち
なひきてもかく
ゆも女八人よ
あさびがそれて
まちとせり
あまりよゆむ



うまくろふにまゝへ
そあなまりて今
きろうられそ
まそらんも分の
かうぎつ入おん
とも参まつり
てんぐの
みやつこ人とうち
にすやでうろんも父が名を
などまするふくかきいくせんと
さりくふんなそうごまうゝかたぐ
ろうごかつにそ名のうきくぬ
よーのり公も和中やろうが身のあ
ろうらでんをおうれしとこそおめ
ろ中とてう日ぞうかもふまところ
まーげかのことりてうすせ
なちて人のるゐとりく
ゆいやくごをそゝし
ののむつりげかのゝ
やえさせるにぞやさまそれ
かなてちぎりしことのもあれ
まうあさとあてえやるる
身よあきらぜのくちー
るうんるどたらうれすまらふ
うらてひゐへ八がらいとへ
かゐるえんあけきそあくとくる
くきちへおゐかゐところが〽

つゞく やくすゑの ところどを つぎ

つぎ
中人
下人

豊國画 如淵外史作

錦重堂新板繪草紙目録

釋迦八相倭文庫 十編 士編 万亭應賀作 士嘉 古編 陽齋豊國画

忠義教誡赤松譚 四編 五編 如淵外史作 六編 七編 陽齋豊國画

神代藻塩草 初編 二編 万亭應賀作 陽齋豊國画

紫菜淺草土産 四編 十返舎一九作 五編 陽齋豊國画

日蓮記旭衣 初編 二編 万亭應賀作 陽齋豊國画

金繪草紙錦繪本類

元大坂町代地角
上州屋重藏版

赤松譚（あかまつものがたり）

首（くび）の巻（まき）

弘化四年丁未新版

一陽齋豐國画

下

錦重堂板

へ13
3736
2

門へ13
3736
2

赤松禪

首巻 下冊

未の春彩彫

如渕外史作

歌川豊國画

錦重堂 寿梓

赤松律師則祐嫡孫
○赤松左京大夫満祐入道 ― 西の方 義教公愛妾 唐橋御前
後醍醐天皇九孫
○後亀山院 ― 小倉宮 ― 女 赤松満祐妾 白旗御前 ― 女 満祐女 かつ子
此人のことハことりのぐさいまゝ
空因 ― 此二人の姫君ハ
つぐくみ
南朝方
○大和住人某 ― 女 ― 女 越智弥郎 元春妻 ― 女 白梅 二歳の時母入水して死
南朝方 大和住人足田九郎妻 同住人 越智弥郎
北朝方 白山満家家老 接佐河内守妻
女 ― 接佐新左門 ― 女 白梅 実ハ越智元春女 ― 女 たまき
元春女 ― 接佐新左門
会氏系図ハ小倉宮の後胤ハ此ハ出て所き侍ル

上のつゞき

▲せけんのさとうみそとうのうそのむすこときこえ
あまくのこてさん雑煮のふろら
のとうらるぎ。あくと足田のあ
きてあさてとうやとうのかとまれ
ばまくぶふさふらひ千人
あまりとふハ茸を
ぶをくしてとうせそ
ふぐたよりも色
るゆもせよ
やまとくんちの
一味のものと
ひとてふるりそ
いくさせんと
かまくのたて
こやちとくら
うまきとそニツ
ふるるとハンき
田のくふのこてあき
さふらんすよ人とき
こけてそちの城へと
りうすえのち
まのあちのくさふそ
かつときもありまさ
まるとりもたくひふ
せうぶまちくるひふ
こうこまるうちうのの
のりてきちのまろ

たちまちふわりそ
伊五ちりとえる
ぬしのうちまふ
ありそのとひき
田のくふきこえ
しらがまくのふ
かさんあるふ
あくれねそけき
ねてとちのまろ
のやけあえて
さぬきそたまえの
ちこえるの
ぬしのうちまふ
まさそのとそろの
つちとうろうや
そてふまざれ
あやどのりこをふのひ
いやこうそうそとを
たやこれてよもやこの
こちたとくまやもそのこ
なりたくあけばかそうのこさう
ちのたてこさんを七八人うそとてしたら
せんとまるこるこるこりてとまをくとも
かくこときなのとるるいつふてとあよ
あへさんしてあやうさこそうこてーに
あふさんのまの拵れ彩をうそそう
つ西ふこうけあけばかそうのこさう
なりのたてこさんを七八人うそとてしたら
せんとまるこるこるこりてとまをくとも
かくこときなのとるるいつふてとあよ
あへさんしてあやうさこそうこてーに
あふさんのまの拵れ彩をうそそう

たひさてーのむすめとうくい白梅ふるやせ孔こちふ
いまのたてさあいつてーのたんのたてでそ
ろのいちのさいときちうのあこちり
たんふるふろうあまとのそがふふぐ
よいろいあぬりよのろうこたの
たののれよろいくうちあそたの
たんのかくまちい
ひまいきう
してどそふ
できるそれを
きうしてく
とせろま
まそたまき
ものちいせんくこるく
まあそのとをくろるふつけ
てもるこそそあかそて
これが十八年の
そのむり大和
くそちのこや
かこのふくうこを
たこことあけうめこ
彩軍とあそうんと
うちうりくこさふ
と人いあちでと
なりとも天ある地
ちるそちるこぐ
引ぐさそふありそ
めそいつーり▲

つゞきみやこへ
左の中分
上の中分
古の下

品屋
庫

山州葛野郡
梅畑乙五郎

如淵分史作

一陽齋豊國画

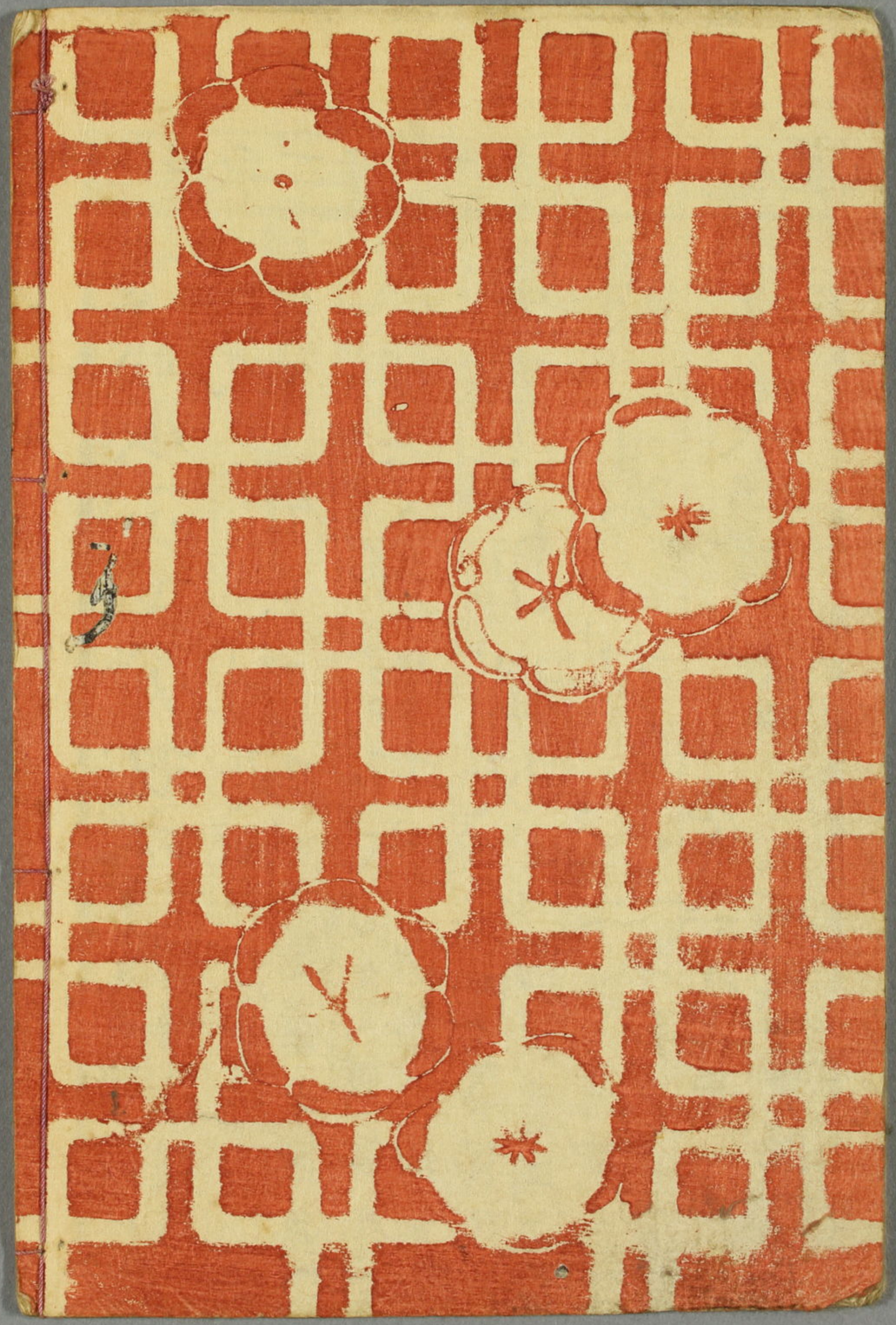
嘉永二年己酉春新板目録

奥奉公編娘一代成人双六　方亭應賀作　一陽齋豊國画

倭文庫太子双六　方亭應賀作　陽齋豊國画

武藝立身館双六　方亭應賀作　陽齋豊國画

奥奉公出世双六　方亭應賀作　陽齋豊國画

将棊双六　方亭應賀作　陽齋豊國画

重地本錦繪團扇所　元大坂町代地角　上州屋重藏板